様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０７７８

研究課題名（和文）高齢者施設におけるケアワーカーによる看取り介護の実践と課題

研究課題名（英文）Practice and challenge of care for nursing care by care workers in elderly facilities

研究代表者
金子　絵里乃（KANEKO, Erino）

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：４０４０９３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、特別養護老人ホームのケアワーカーがどのような看取り介護を行っているのか、看取り介護に対してどのような意識を持っているのか、どのような教育研修を受けているのかを明らかにし、看取り介護の意識や教育研修が実践にどのような影響を与えるかを検証した。さらに、ケアワーカーが看取り介護によって経験するグリーフとその対応を明らかにし、経験年数によってどのように変化してきたのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we clarified care worker's care for nursing care, what kind of consciousness the care workers have with regard to care for nursing care, what kind of educational training the care workers are receiving, the care worker’s grief and its coping. Based on survey results, we examined how consciousness of attending nursing care and education / training affect practicing.

研究分野：社会福祉学

キーワード：看取り介護　ケアワーカー　教育研修　グリーフ　特別養護老人ホーム

１．研究開始当初の背景

看取り介護については、主に社会福祉学や看護学で研究が蓄積されており、さまざまな研究が行われてきた。先行研究では、全国的に高齢者施設において看取り介護が行われているものの、それぞれの施設で独自に行われており、実践が体系化されていないことが報告されている。また、看取り介護を行っている援助者が施設で看取ることに不安や悩みを抱えており、スタッフへのケアが急務の課題であることが指摘されている。

社会福祉学の立場から看取り介護の実践を考究し、社会福祉専門職として看取り介護を行っているケアワーカーの実践と課題を明らかにし、その取り組みを社会的にも教育的にもサポートすることが必須と考え、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究では、下記の目的を設定し、量的調査および質的調査を実施した。

（１） 量的調査

特別養護老人ホーム（以下、特養）のケアワーカーがどのような看取り介護を行っているのか、看取り介護に対してどのような意識を持っているのか、どのような教育研修を受けているのかを明らかにし、看取り介護の意識や教育研修が実践にどのような影響を与えるかを検証した。

（２） 質的調査

特養において、ケアワーカーが看取り介護によって経験するグリーフとその対応を明らかにし、経験年数によってどのように変化してきたのかを考察した。

３．研究の方法

（１） 量的調査

調査対象は、全国の特養に従事するケアワーカー2350 名である。標本抽出は、47 都道府県ごとに特養から系統抽出法により 25 施設、計 1175 施設を無作為抽出し、各施設に調査票 2 部を同封して郵送した。調査期間は、2014 年 12 月初旬から 2015 年 1 月末である。回収した調査票は 481 部であり、有効回答数は 442 部、有効回答率 18.8%であった。

調査票の作成の際には、事前にプレ調査としてケアワーカーへヒヤリング調査を実施し、その結果と先行研究から「看取り介護に対する意識」について 6 項目（5 件法）、「看取り介護の実践」10 項目（2 件法）、「看取り介護に関する教育研修」13 項目（2 件法）を作成して用いた。その他に、ケアマニュアルの有無、看取り経験の人数、スーパーバイザーの有無などを用いた。基本属性には、性別、年齢、学歴、経験年数等のデータを得た。

分析方法は、「看取り介護の実践」10 項目、「看取り介護に関する教育研修」13 項目について、実践している項目と必要と考える項目について各々2 値データで集計し、度数分布表から実態を把握するとともに、t 検定によって、実践および教育研修の実際と必要性を比較検討した。また、看取り介護の実践の合成変数を従属変数、その他の変数を独立変数とした重回帰分析を用いた。統計分析には SPSS Statistics 23.0 for Windows を用いた。

（２） 質的調査

関東・関西圏で、看取り介護を積極的に行っている特養のケアワーカー16 名に半構造化面接によるインタビューを約 90 分実施した。

データ分析は、ナラティブ分析法のなかのカテゴリカル・コンテント分析法を参考に次のように行った。①データの逐語記録化、②ライフ・ストーリーの整理、③ストーリーの抽出、④グリーフとその対応について、ケアワーカーが何を語っているのか、その背景や要因には何があるのかを個別分析し、それを象徴するストーリーを③からさらに抽出、⑤16 人のストーリーから類似したストーリーを探索、⑥多くのケアワーカーが語ったキーとなる言葉や、１人の語りであっても事象を象徴する言葉をカテゴリーとして生成した。

４．研究成果

（１） 量的調査の結果と考察

対象者の性別は、男性が 37.1%、女性が 62.9%であった。年齢階層別にみると、30 歳代が約４割と最も多く、40 歳代、20 歳代が多かった。平均年齢は 38.66 歳（SD=9.94）。平均介護職経験年数は 11.30 年（SD=6.10）。看取り経験については、全くない人は 1 割未満であり、4 割弱の人が 10 名以上の看取りにかかわっていた。

看取り介護の実践を従属変数とした重回帰分析の結果、看取り介護の教育研修（β=.302、p<.001）、ケアマニュアルの有無（β=.258、p<.001）、これまでの看取り経験の人数（β=.279、p<.001）という変数が看取り介護の実践に影響を与えることが明らかになり、モデルは有意であることが示された（表１参照）。一方、看取り介護に対する意識やスーパーバイザーの有無、学歴や経験年数などの変数は影響を与えないことがわかった。

表１．重回帰分析結果

説明変数	β
看取りに対する意識	.039
看取り教育・研修	.302 ***
ケアマニュアルの有無	.258***
看取り経験の人数	.279***
スーパーバイザーの有無	.019
性別	.030
年齢	.033
経験年数	-.080
学歴	-.065
R^2	.359
調整済R^2	.340
R	.599
F値	19.176
総数(n)	318

注１）$^{***}p$ <0.001, $^{**}p$ <0.01, $^{*}p$ <0.05

本研究において、看取り介護に対する意識や看取り教育・研修が看取り介護の実践に影響を与えるとする仮説検証を行った結果、仮説の一部を支持する結果を得た。看取り教育研修を受けていること、ケアマニュアルがあること、看取り介護の経験人数が多いことが、看取り介護の実践度に影響を与えていることが明らかにされた。また、死生観や援助観といった看取り介護に対する意識やスーパーバイザーの存在は影響しておらず、教育や経験を通した看取り介護にかかわる具体的な知識や技術の習得、経験の積み重ねが実践に結びつく可能性が示唆されたと言える。

また、看取り介護の実践や研修については、看取り介護の中心は「利用者の体調変化の観察や死の兆候の把握」であり、「ベッド周辺の環境整備」や「利用者や家族の死への不安に対する心理的ケア」、「葬儀後の遺族ケア」は必要と感じつつも十分に実践できていないこと、現状の看取り教育研修の中心はケアマニュアルや看取り介護の知識・技術に関するものであり、研修は具体的な看取り介護実践の意識化に結びつき、影響を与える可能があること、ケアワーカーからは臨終に近い終末期の実践スキルに関する教育研修が求められていることが明らかとなった。

今後、看取り介護において医療との連携の強化が必要とされており、ケアワーカーには医療的なケアも含む広範な役割が求められると推測される。そのため、看取り介護に結びつく教育研修として、臨終に近い終末期の実践スキルに関する教育研修の一層の充実が期待される。

（2） 質的調査の結果と考察

表１が質的調査の対象者一覧である。ケアワーカーが経験するグリーフとその対応に関する分析を行った結果、４段階の経験年数によってカテゴリーが生成された。経験年数の区切りは、①1～5 年、②6～10 年、③11～15 年、④16～21 年である。以下、カテゴリーは「」、語りは≪≫で表記する。

表１　対象者一覧

	年齢	性別	経験年数
A	20 代	男性	1 年
B	20 代	女性	1 年
C	20 代	女性	2 年
D	40 代	女性	3.5 年
E	20 代	女性	5 年
F	20 代	女性	6 年
G	20 代	女性	7 年
H	40 代	女性	8 年
I	40 代	男性	9 年
J	30 代	男性	12 年
K	40 代	男性	13 年
L	30 代	男性	15 年
M	40 代	男性	17 年
N	40 代	女性	17 年
O	30 代	女性	19 年
P	40 代	女性	21 年

①では、ケアワーカーが経験するグリーフとして、「利用者のいのちを預かっている重責感」「利用者の死にたちむかう恐怖心や不安感」「これでよかったのかという後悔」という３つのカテゴリーが生成され、その対応として「同僚が話し合う職場環境を作る」「自分が今できることをしっかりとやる」という 2 つのカテゴリーが生成された。経験年数 1～5 年において、ケアワーカーたちは初めて看取りを経験することが多い。「利用者のいのちを預かっている重責感」や「利用者の死に立ち向かう恐怖心や不安感」は多くの人が語っており、経験年数の短い人々へのフォローアップやケアが必要不可欠であることが指摘できる。

今回の調査では、「同僚が話し合う職場環境」がすでに形成されており、同僚と話し合い、試行錯誤しながら看取り介護を行っていた。そのことが結果として、「自分が今できることをしっかりとやる」といったケアに対する意識の向上につながっており、≪もっといいケ

アをしたい≫≪良い終わり方をさせてあげたい≫という語りが表出されたと考えられる。

②において、ケアワーカーは①におけるグリーフとその対応を継続して経験していた。①ではみられなかったこととして、「死を自然なこととととらえるようになる」というグリーフを経験し、その対応として「家族と相談しながらともに利用者をケアする」ことについて語っていたケアワーカーがいたことである。

経験年数 6～10 年になると、ケアワーカーは看取り介護の経験を重ね、専門性を確認しながらケアを展開させていく。また、そのプロセスにおいてケアワーカーのなかに死生観が醸成されていく。それにより、死を自然なこととして捉えると語るケアワーカーが多かったことが考えられる。また、①ではケアワーカー自身のグリーフへの対応について語られることが多かったが、②では≪家族とお互いに満足できるようにケアする≫≪家族側の意見も聞きたいと思う≫というように、「家族と相談しながらともに利用者をケアする」ようになり、ケアの協働体として家族を意識化するようになっていたことも特徴的であった。

③において、ケアワーカーは①と②におけるグリーフとその対応を継続して経験しつつ、「看取りケアマニュアルを生かしてケアする」「エンゼルケアを正確に学ぶ」というグリーフへの対応について多くを語っていた。経験年数 11～15 年は、ケアワーカーが現在経験しているグリーフよりも、はじめてケアに携わった頃の思いとして、恐怖心や不安感を述懐するような語りが多かった。その一方で、組織的な対応を視野に入れた実践を積み重ねてきた時期に入るため、「看取りケアマニュアルを生かしてケアする」というように、組織で作成したマニュアルを生かすことを視野に入れたり、「エンゼルケアを正確に学ぶ」ことをケアワーカーとして意識化している人たちも多く、職務に対して責任をもって仕事していることがうかがえた。

④では、これまでの①②③の経験年数で語られた内容がおおよそ語られており、設定されたカテゴリーはすべて継続していることが明らかとなった。

経験年数 16～21 年は、ケアワーカーとしてベテランの域に達する経験年数の段階であるが、経験すればするほど「後悔」が強くなることが語られており、ケアワーカーが経験するグリーフの特徴がみられた。本研究の結果から、経験年数を経るごとに語りの強弱はあるものの、「後悔」はケアワーカーが普遍的に抱き続けるグリーフであることが考えられる。ただ、その「後悔」を後悔したままにせず、職場で改善を試みたり、家族と協働で利用者を看取り、ケアを日々向上させていることが明らかとなった。

また、経験年数を重ねるごとに、「死を自然なことと捉えるように」なり、専門職として看取り介護で何ができるのかを深く考えていることがうかがえた。特に、経験を重ねるごとに家族への支援を意識するようになり、看取り介護において、利用者のみならず家族への支援の重要性を認識していることが明らかとなった。さらに、看取り介護において≪スタッフ同士の話によって不安を取り除く≫こ

とを意識していたり、≪マニュアルにのせられない思い≫をスタッフに伝えることを努めているなど、経験年数を重ねれば重ねるほど、ケアワーカーとしての専門性を発揮し、個人的なグリーフを整理して対応していることがうかがえた。

５．主な論文等

［学会発表］（計２件）

① 金子絵里乃・澤田有希子・佐藤繭美、特別養護老人ホームにおけるケアワーカーの看取り介護の実践と影響要因に関する実証的研究、日本社会福祉学会、2016 年 9 月 11 日、佛教大学（京都府京都市）

② 澤田有希子・金子絵里乃・佐藤繭美、特別養護老人ホームにおけるケアワーカーの看取り介護の実践と教育研修の実態に関する量的調査研究、日本ソーシャルワーク学会、2016 年 7 月 10 日、同志社大学（京都府京都市）

６．研究組織

（１） 研究代表者

金子　絵里乃（KANEKO, Erino）
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：40409339

（２） 研究分担者

澤田　有希子（SAWADA, Yukiko）
関西学院大学・人間福祉学部・准教授
研究者番号：60425098

佐藤　繭美（SATO, Mayumi）
法政大学・現代福祉学部・教授
研究者番号：90407057